

記録

16ミリ

カラー／26分

日・英・西・中・スワヒリ・ベトナム語版

■企画

(財)家族計画国際協力財団

■監修

国立公衆衛生院・衛生行政学部長

橋本正己

(財)家族計画国際協力財団・常任理事

国井長次郎

スタッフ

■製作

村山英治

■脚本・演出

村山正実

■撮影

藤井敏貴

■選曲

深沢康雄

■解説

羽佐間道夫

厚生省推薦

戦後30余年、日本は世界屈指の長寿国で、乳児死亡率の低い国となった。戦争直後の食糧危機、悪疫大流行に苦しんだ世代にとっては、信じられないほどの大きな変化である。この変化をもたらした要因として、生活水準の向上、高等教育の普及、医療や公衆衛生分野での科学技術の進歩などがあげられるが、中でも大きく力のあったのは、30年間一貫してみられる地域住民の保健活動への取り組みであった。この映画は、日本の保健活動の経験を、戦後の得難い記録映画、ニュース映画等をもとにたどっていく。この映画は、現在努力している発展途上国の人々にも見られ、多いに力を与えている。



伝染病や栄養失調の蔓延した敗戦後の日本で、住民による地域の保健活動が最も早く起きたのは農村であった。まず各地に広まつていったのは、ハエや蚊などの害虫駆除の運動であった。この運動はやがて都市にも広がり、町をあげての活動に発展していった。この運動と並んで大きな柱となつたのは、寄生虫駆除運動であった。当時、日本人の7割が回虫に、農民の3割が十二指腸虫（鉤虫）に感染していた。もうひとつ忘れてならないのは、母子保健の活動であった。

当時乳児死亡率は非常に高く、これをゼロにしたいという声が母親たちからあがつた。村に住む献身的な保健婦や助産婦の力が、母親たちの活動を支えた。また、昭和27年頃から始まった新生活運動も、日本の農村の近代化を考える上で注目すべき運動のひとつであった。例えば簡易水道の普及は婦人の労働を軽くしたばかりでなく、村の生活自体を大きく変えた。

映画は最後に、現在も活発な活動を続けている大阪府吹田市の吹田母子会の母親たちの活動を紹介する。自主的な乳児検診や妊産婦検診の運営にまで展開したこの会の活動は、住民参加による保健活動の見事な成功例といえるだろう。